

純粹経験における「一」と「多」の思想

- 西田幾多郎とW. ジェイムズの比較研究 -

論文提出者 田畑北斗

論文の要旨

本論文では、西田幾多郎の展開する「純粹経験」がどのような論理構造であるかを明確化し、その意義について検討することを目的としている。

西田は『善の研究』において、「純粹経験」を真の实在 reality として定義し、あらゆるものを説明しようと努める。彼にとって实在とは、「現実そのままのもの」である。そのような实在は、純粹に客観的と定義される物質の世界とは区別されるものである。そのため、主観と客観に代表されるような二元論を克服することが目指されるのである。

同時期にアメリカにおいて「純粹経験」の着想によって二元論の克服をめざしたのが、ウィリアム・ジェイムズである。彼は晩年、合理論と経験論との対立を超えるために「根本的経験論 Radical empiricism」の立場をとる。

さて、本稿の具体的方法は、初期西田哲学に関しては、『善の研究』の出版までの草稿および出版後の講演記録や講義ノートを元に、「純粹経験」の意味と位置づけを考察する。ジェイムズに関しては、遺稿 *Essays in Radical Empiricism* (邦題: 『根本的経験論』) に収められている諸論文を中心としながら、根本的経験論における「純粹経験 pure experience」の概念と彼の哲学における位置づけについて考察する。また、同じく遺稿 *Some Problems of Philosophy* (邦題: 『哲学の諸問題』) を援用することで、ジェイムズの晩年の思想の深化を明らかにする。そして、彼らの哲学が共に目指す二元論の克服の具体的な一例として、「一」と「多」の問題を取り上げて検討し、両者の立場の根本的な論理の差異から西田哲学の論理を浮き彫りにする。

第1章では、ジェイムズの「純粹経験」の概念に関して根本的経験論における意義を明らかにする。その際、素材として捉えられる「純粹経験」がどのようにして主観と客観という二元論的なものの見方として通常考えられるのかについて、意識を“機能”として考えることから検討する。また同時にそれは知覚と概念の問題であるため、概念化のプロセスを分析する必要がある。そして、その概念化を通して見えてくるプラグマティズムの認識理論と実践的行為との関わりについて考察する。

第2章では、西田の「純粹経験」の『善の研究』における展開およびその背景の裏づけを明らかにする。まず、現実そのままであり、一として真理である「純粹経験」の性質について考察する。そのために意識を主客の区別のない現象として考えていくことが必要となる。そして現象である以上、純粹経験が動的な性質を帯びることは必至であるが、それが一つの体系として機能することについてさらに検討を重ねる。そしてそこから導き出される純粹経験の統一性が、どのような形で多義的、多層的な構造、また矛盾や対立と調和しうるのかについて考察する。

第3章では、西田とジェイムズの思想の比較検討から両者の立場の類似点と相違を明らかにする。さらに問題を「一」と「多」の問題へと絞っていく。そのために西田哲学に見られる「一」と「多」の取り扱いについて、特に「即」という現象について、鈴木大拙の「即非の論理」および山内得立の「レンマの論理」といういわゆる東洋思想からの論理をもって問い直す。そして最後にジェイムズの「一」と「多」の思想に見られる多元論の一元論との比較検討を行なうことで、西田の純粹経験が主張する直接性がいかにして論理化が可能であるのかを明確化する。